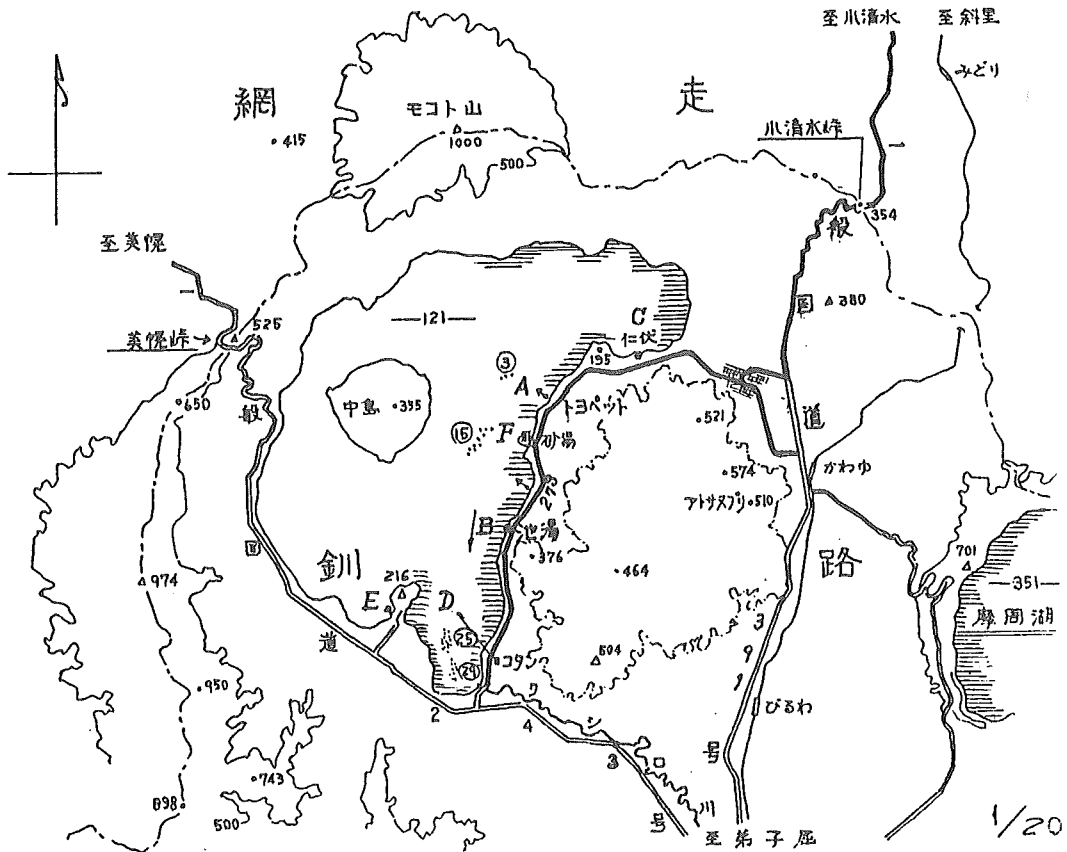


屈斜路湖の白鳥

玉田 誠

別項「定時定点調査について」のVの3・4・5項に関連する総合的な一例として阿寒国立公園内の屈斜路湖の白鳥の場合について述べてみたい。

私が屈斜路湖に白鳥が渡来している事を知ったのは偶然の事だった。勤務校から帰宅する定期バスの中で小耳にはさんでの事で昭和42年の師走の中頃であったが、聞くところによると白鳥の散見は同湖が昭和9年12月4日に阿寒国立公園の一部として指定される以前からであったという。主として冬山での造材に関わった人たちの目撃によるものである。国立公園に指定されてからは同湖の南岸沿いの道路（以下湖岸道）も逐年整備されたが砂利舗装であった。この湖岸道は国道243号線と川湯温泉市街を経て国道391号線を結ぶ主要道として昭和35年代から冬期間も除雪は行われていた。しかし白鳥が同湖に憩う期間中は交通機関の運行もなく、人の目に触れる機会も少なく話題に



阿寒国立公園屈斜路湖付近図

も上らなかったのである。一方マイカー時代の到来とともに冬期間の湖岸道路の利用者が増え自然餌に頼って越冬していた白鳥群がドライバーたちの目にとまる様になり口伝される一方、釧路川が貫流する弟子屈市街に白鳥が憩ったりして話題になると共に、自然保護に関するマスコミの報道密度も漸く高くなり世に知られる様になったのである。(このことは瀧沸湖の場合も同じである)。

同湖が単なる中継地ではなく自然の状態で越冬する白鳥もいることは既に2・3年前から一部の人には知られていたのであるが、私が同湖で最初に白鳥を目撃したのは昭和46年1月3日であって湖岸の3地点で成鳥57・幼鳥13・合計70羽であった。

昭和46・47年頃2人の人がほぼ同時に白鳥に対する餌付けに成功した。その1人は北見トヨベットの湖畔寮の管理人川村勇蔵氏でその給餌地点は図のA(以下トヨベット)であり、他の1人は中川勝次郎氏で池の湯という露天風呂の傍で自噴温泉を持つ主として湯治客を扱う宿屋の主人でその給餌地点は図のB(以下池の湯)である。私どもの湖岸調査では以上のほか仁伏温泉(1軒の旅館と営林署の寮がある)で図のC(以下仁伏)、屈斜路湖の水が流れ出す釧路川の源流点付近のアイヌコタンで図のD(以下コタン)及び和琴半島の露天風呂付近で図のE(以下和琴)が定住的越冬地点であることを知った。以上の5地点のうち和琴のみは給餌に頼らない少数羽の越冬群である。またいずれの地点も温泉が湧出し、かつ湖岸は地熱の関係で、小規模ながら数条の「オミワタリ」も生ずる厳冬期でも凍結しないところである。川村氏も中川氏も弟子屈町からながしかの援助を受けながら殆ど自力で白鳥の世話をしていたがトヨベット域は湖岸道路(道道278号線)の間近でそのアスファルト舗装に際し道路と湖岸との落差を10数段のコンクリート階段を設けて行人旅客が最も白鳥と接し易いところとなり屈斜路湖の白鳥といえはこのトヨベット域の白鳥を指す様になった。一方池の湯の白鳥は他に2・3軒の湯治旅館があり道路から直接見ることが出来ないところで、数十羽の越冬白鳥については知る人のみぞ知るところであった。トヨベット地域では屈斜路湖で越冬する白鳥の約80パーセント(600羽前後)を数えた事もあった。川村氏も中川氏も共に毎日白鳥の動向を記録されていたので私共も毎月同湖の調査に赴き両氏から各日曜日の資料の提供を受け、定時定点調査資料として活用させて頂いていた。

しかし川村氏も中川氏も寄る年波には勝てず、白鳥への給餌を断念するに至りそれぞれの土地を離れたので、両氏の給餌を当てにして同湖で越冬を完了していた数百羽の白鳥は致命的な打撃を受けることとなったのである。すなわち両氏ともそれぞれの置かれていた立場上後継者の育成が出来なかったのである。標識鳥もしばしば記録され800羽にも達する同湖の白鳥についての定時定点的資料が得られなくなったのは残念であったが取るべき手段も方法もなかった。私たちもかつて強力な働き掛けの効く知人を介して仁伏温泉での調査を依頼したことがあったが、たかだか20羽程度の白鳥でさえ2シーズンで打ち切られた経験から言っても長期に渡っての定時定点調査はその重要性が認識できる人か、「白鳥馬鹿?」とでも言われるような人でなければ持続は困難だと思知らされていた。その後も私たちは散発的ではあったが毎月1度程度は屈斜路湖南岸一体の調査は実施してきたが4・5年前からは私自身の体調が悪化して同湖の調査は自然消滅の形になってしまった。それにしても両氏からの給餌を当てにして越冬していた800羽にも達する白鳥のその後はどうなっているのか、放置すれば餓死鳥も出るのではなからうかと懸念しながらも時はいたずらに過ぎ去っていった。

しかし「捨てる神あれば拾う神あり」で川村・中川両氏の給餌活動が漸く困難になってきた頃から夏場は屈斜路湖随一の行楽地である砂の湯・囀中のF（以下砂の湯）に立ち寄って湖岸でひとときを楽しむ人が漸増し、幾許かの収入を期待して冬期間は閉店していた売店も通年開店し、たまたま憩っていた白鳥に餌を与えたことから池の湯やトヨベットの白鳥たちがここに集まるようになり、今日ではここ砂の湯が白鳥の名所となっている。屈斜路湖の白鳥は既に有名になっており訪れる人も多く越冬白鳥群も飢餓からは救われるようになった。売店の人たちの商売（経済性）と飢餓に瀕した白鳥とが期せずして相寄り相助ける形になった訳である。商売の方が先行する売店の人たちだから、白鳥の数なども「多いようだ・少ないようだ」的な見方しかせず、屈斜路湖の白鳥の大部分が集結しているにも関わらず月1回（第2日曜日）の正確な情報獲得にも協力は得られていない。現在は屈斜路湖および弟子屈市街地内の釧路川の白鳥についてはシーズン中に一度今野重郎（Shigeo Konno）氏のボランティア的調査があるのみであるが屈斜路湖での越冬白鳥数は漸減の傾向が見られる。観光客のみの給餌量では餌不足なのであろう。

屈斜路湖の場合は観光資源的にかかなりの数の白鳥がその命を保つことが出来たが、人が自然に関わる時は単独では早晚限界点に達する事の一例である。水原町の瓢湖の様に3代・4代?に渡っての責任ある世話か、各地に見る「……の会」的組織作りによつての後継者の育成が計れないところでは自然界に手を出す事は危険である。悪意はなくとも結果的には自然の体系を破壊することになりかねない事であり、今更ながら自然界の営みに手を加えることの可否について考えさせられたのであった。給餌に頼ることなく越冬出来る環境の確保と保全がむしろ急務である。

※ 文中「私」ではなく「私たち」となっているのは、私はオーナードライバーではないために一挙手一投足の全てを誰かにお助け願わなければならず、その点については下記の方々の長年月にわたる献身的なご協力に心から感謝の意を表す。

更科智司 中橋康信 森 茂 金沢裕二 岡本俊一 今野重郎